

ディベートと前後ライティング融合授業における大学新入生の学び

ーコミュニケーション力・論理的思考力・リテラシーの育成ー

横浜国立大学
橋本 ゆかり

1. はじめに

1.1 本稿の目的

大学に入りたての教育学部1年次生に向け、ディベートとライティングを統合した授業を試みた。本研究は、その実践における新入大学生の学びを明らかにしたものである。当該授業は、新入大学生に向け今後有意義な大学生活を送るために、授業への参加方法と学びに必要なリテラシー能力を身に付けさせることが大きな目標となっている。また、教育学部の授業であることから、教育に関する知識を深め、教師として貢献する意欲を高めることも目標に含まれる。

1.2 新入大学生のコミュニケーション能力

新入大学生は、新しい生活の始まりと共に様々な変化を経験することになる。高校までの学習は、受動的、知識重視型であったと推察されるが、大学では、能動的かつ主体的学習への転換が求められる。山田(2006)は、意欲減退傾向と大学生活不安傾向の2つの側面から大学新入生には、学力の低下とともに大学生活への不適應の問題が潜在しているという。「自己不確実感」「不安全感」「友人や教員との対人関係を築けない」「学内での居場所を見つけることができない」「履修登録等のさまざまな手続きが理解できていない」といった問題である。これらの問題の根源的原因の1つとして考えられるのは、学生のコミュニケーション力不足である。実際、大学のカウンセラーにインタビューしたところ、「友だちができない」「友だちに声が掛けられない」「面と向かってしゃべれない」「携帯で伝える癖がついている」「自分の意見をぶつけるのが怖い」といった内容が挙げられている。表層的には、学習についていけないという悩みよりも、人間関係で悩みが多いということになる

が、これらの問題は、根底では、相互に関連しているのではないと思われる。

近年、学生同士の会話を聞いていると、なるべく短くてインパクトのある表現を用いて意図を伝達しようとする傾向にあることに気づく。メールやライン(LINE)などの普及によりさらにその傾向は強まっていると感じる。新しいコミュニケーションツールでは、絵文字や絵などを用いて端的に内容や感情を伝えることもできて便利である。確かに、効率よく伝えることには優れているのかもしれない。現代の子どもは「言葉なしで思考している、つまり考えている内容がアイコンニックにぱっと出る」のではないかという指摘もある(正高・辻 2011)。便利さを手に入れるのと引き換えに、言葉を重ねて対話を深めたり、言葉を駆使して相手を説得させるような能力を少しずつ失っているのではないかと考える。

1.3 大学で育成すべき能力

ライティングに関する教育は、小学校における感想文や作文の指導から始まる。大学に入ると、レポートを作成することが多くなり、最終的には卒業論文を執筆することになる。その間、学生には、適正なリテラシー能力を身につけさせなければならない。やがて学生は社会に出て仕事をするわけだが、仕事では、上司や同僚などに意図や理由を明確に伝え、指示や意見を理解し、許可を得ながら進めなければならない場合が多い。書類作成やプレゼンテーションの機会も増えるであろう。社会で活躍するためにも、大学時代に、理由と主張との因果関係を明確に示せる論理的展開能力をしっかりと身に付ける必要があると考える。

研究対象とした授業は、教育学部の学生約200名をいくつかの組に分け、各組を担当した教員が授業目標に沿って授業内容を考え設定することになっている。そこ

ディベートと事前事後ライティングの融合授業における大学新入生の学び

で、その担当教員の1人である執筆者は、授業内容として、2つのことを考えた。1つは、大学での勉強の基盤となる学習基礎能力の育成で、もう1つは、コミュニケーション能力の育成である。1つ目の学習基礎能力の育成については、レポート作成やプレゼンテーションを行うのに必要な論理的思考と論理的展開能力の育成を重点的に鍛えることを目指した。これは、2つ目のコミュニケーション能力と表裏一体の関係であり、結果としてコミュニケーション能力向上に繋がる。この2つの能力を支援することで、相乗効果が期待されると考えた。

2. ディベートとライティングの統合授業

人間は、話し言葉から書き言葉へと移行することで発達する。ヴィゴツキー（1934）の言葉を借りれば、「最大限に圧縮された言葉（内言＝自分との対話）を最大限に展開された構文の整った言葉（書き言葉）へと展開する」プロセスであるといえる。「書き言葉は、自分が自分の言葉をどのように構成しているのかに注意を向け、その過程を自覚し、随意的に行わなければならない。つまり書き言葉は自覚性と随意性を要する」（ヴィゴツキー1934）。

このことからわかるように書き言葉は、自身の自由な発想や考えを、他者を意識し自覚的に整えられたものといえる。この整えのところでは、もちろん語彙や文の構造なども必要であるが、筋の通った文章、つまり論理性が要求される。このことからライティング指導が、論理的展開能力の育成に効果的であるといえる。しかしきなり質の高いライティングを求めるよりも、話し言葉からの段階的発達を支える方法はないものかと考えた。ディベートは、論題を決め、肯定側、否定側の2組にわかれて、決められたルールに従って、それぞれの主張する正当性と妥当性を競い合う知的ゲームである。肯定、否定側に分かれる際、自分の意見に関わらず割り振られるので、話し言葉を扱う活動で論理性が求められる。こういったディベートの性質から、ディベートで扱う言葉は、話し言葉と書き言葉の中間に位置するともいえる。

そこで、授業構成を次のように考えた。ディベートと並行してライティングの指導を行う。論理的展開能力、コミュニケーションの育成を目指し、講義、ディベート、ライティング活動、添削指導の4つの領域を設定した（図1参照）。

このような授業を設定し、ディベートとライティングの融合授業の効果を探る。対象とした新入大学生に

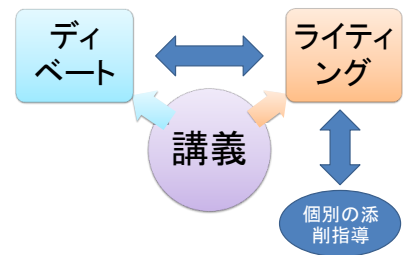


図1 ディベートとライティングの統合授業

は、留学生1名も含まれていたため、日本語教育の観点からも考察を行う。日本語教育においても、ディベートの授業が取り入れられている（鄭・谷守2012、野原・浅野2011、橋本2013、文野1994等）。

3. 授業内容の流れ

3.1 授業の流れ

ディベートとライティングの統合授業は次のとおり進めた。ディベートとライティングの関係図を図2に示す。



図2 主張文ライティングとディベート

1. ディベートのやり方、流れなどを説明する。2. スピーチの仕方と態度を教える。3. 宿題として、ディベート前主張文を書かせる。（主張文は、次の授業で行われるディベートの論題についてであり、2回ディベートが予定されている場合は、2つ論題のうち1つを選ぶ。肯定・否定も学生が選択する。）次の授業で提出させる。（提出されたディベート前主張文は提出の翌週にフィードバック用紙とともに返却する。）4. 緊密な論理的展開の仕方をパワーポイントで説明する。緊密な論理展開、理由付け、ナンバリング、ラベリング等について説明する。
5. ディベートを行う。6. 宿題として、ディベート後主張文を書かせる。次の授業で提出させる。（提出されたディベート後主張文は提出の翌週にフィードバック用紙とともに返却する。）

上記4の論理的展開についての説明は、2回目の主張文作成の前に行った。1回目の前に行わなかったのは、当初の学生の知識を知りたかったからである。

上記3と6のディベート前後の主張文は、論理的展開に必要なチェックシートを作成し、それを用いてチェックを行った。加えて、添削者が気づいた点を入れてフィ

ディベートと事前事後ライティングの融合授業における大学新生の学び

ードバックも行う。チェック項目は、「構成」「ナンバリング」「ラベリング」「接続詞の使用」「論理性」「論理的緊密度」「説得力」「語彙、表現」である。

3.2 ディベートに関する作業フロー

ディベートに必要な作業は次の通り進めた。

1. チーム分けをする (4~5 名/チーム編成、4 チーム)。
2. 論題をブレインストーミングで複数挙げる。3. 対戦チームが話し合いの上、論題を選択し、肯定側、否定側を決める。4. チームでの打ち合わせ、データ収集、ディベートの担当箇所を決める。思考マップや立論シートを渡して考えさせる。5. ディベートを行う。ディベートに参加しないチームは、1 チームが司会、タイマー、審判を担当し、別のチームは参観し、参観後に両チーム宛てにフィードバックを書いて渡す。論題を表1に示す。

表1 ディベートの論題

論題1	義務教育において教材はデジタルにすべきである。
論題2	制服は廃止すべきである。
論題3	日本で原発は廃止すべきである。
論題4	インクルーシブ教育を進めるべきである。
論題5	部活動は外部委託すべきである。
論題6	中学校において給食を導入すべきである。
論題7	小学校で少人数数学級を進めるべきである。
論題8	小学校で各科目の教科担任制を導入すべきである。

3.3 ディベートの形式

ディベートは、表2のとおり進めた。

表2 ディベートのプロセス

1 肯定側立論	2 作戦タイム	3 否定側尋問
4 否定側立論	5 作戦タイム	6 肯定側尋問
7 作戦タイム	8 否定側反駁*	9 肯定側反駁
10 作戦タイム	11 否定側総括	12 肯定側総括

*反駁は反論と再証明のことである。

司会 1 名、ディベーター各チーム 4~5 名、審判 3~4 名 (うち、1 名がタイマーも兼ねる) で構成される。

4. 研究方法

4.1 調査協力者

調査協力者は、新入大学生 16 名 (1 名留学生) である。

4.2 データと分析方法

授業最後に振り返りを提出させた。授業後の振り返りシートでは、質問につき記述回答してもらった。(質問内容: ディベート能力が向上したかどうか、それはいつ頃からか/ディベートがうまくいかなかったことがあ

るか、その理由/ディベート前の主張文とディベート後の主張文はどのように違うか/書く力は向上したか/思考力、話す力、書く力がついたか/統合授業の良かった点と良くなかった点は何か/その他の成果、感想等。)

記述回答部分をデータとして、以下の2つの方法で分析する。まず、振り返り用紙に記載されていた内容をテキストベースにし KH コーダーに掛け、共起ネットワークを作成する。全体像を視覚化し、共起ネットワークで示されたノード (抽出語) から、記述分析のためのテーマを決める。テーマを中心とした記述分析から、ノードの意味やノード間のかかわりを探る。ただし、表現の仕方が学生によって異なるため、一概に大きなノードのみに意味があるわけではない。その点も考慮し、データからの細かい情報を拾い上げ、学びに関わるキー概念を明らかにする。

5. 結果と考察

5.1 共起ネットワークから探る学びの全体像

共起ネットワークは、図3のとおりとなった。

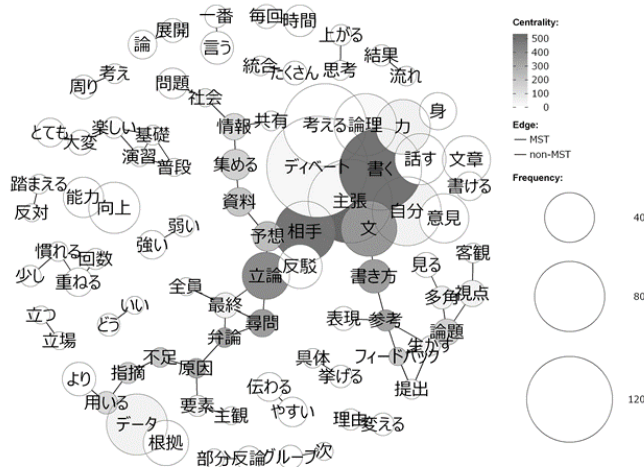


図3 学びの概念の要素と全体像

共起ネットワークから概ねの全体像を捉えると次のようになる。最大ノードの「ディベート」に注目すると、「書く」「話す」「考える」「論理」「自分」「意見」といった複数ノードの集合がみられる。その上方には「統合」「たくさん」の纏まりがある。「ディベート」には「相手」「予想」「反駁」「立論」とのリンクがみられ、「尋問」「弁論」「原因」と繋がっている。「原因」は「要素」と「不足」にリンクし、「不足」は「指摘」と大き目のノードである「データ」「根拠」に繋がっている。一方で「予想」からは「資料」「集める」

ディベートと事前事後ライティングの融合授業における大学新入生の学び

「情報」「社会」「問題」といったノードの連なりがみられる。「書く」「主張」「文」の纏まりは、「書き方」「参考」「表現」「フィードバック」と繋がっている。「生かす」「論題」は「多角」「視点」へ、さらにそれぞれ「見る」「客観」とリンクしている。形容詞をみると、「とても」「大変」「楽しい」と相反する心理を表すノードリンクがあり、心的変化を表す「慣れる」と「回数」「重ねる」との纏まりもみられる。

これらノードのかかわりから、表3のとおりテーマを設定した。表3の右欄は関連した抽出語である。

表3 テーマと関連した抽出語

テーマ	抽出語
A ディベート	[相手][予想][反駁][立論][尋問][弁論][原因][要素][不足][指摘][データ][根拠]
B 心的態度の変容	[とても][大変][楽しい][慣れる][回数][重ねる]
C 主張文・ライティング	[書く][主張][文][書き方][参考][表現][フィードバック]
D ディベート(話す)とライティング(書く)の統合	[書く][話す][考える][論理][自分][意見][統合][たくさん]
E 視点の獲得	[生かす][論題][多角][視点][見る][客観]
F 社会問題の認識	[社会][問題][情報][集める][資料]

5.2 記述分析による学びの詳細な実態

表3に示したテーマごとに、記述分析を行い学びの実態を明らかにする。抽出されたキー概念は●で示す。

(関連した抽出語を[]内に示した。「」内は学生の記述をそのまま転記したものである。)

A【ディベート】

[相手] [予想] [反駁] [立論] [尋問] [弁論] [原因] [要素] [不足] [指摘] [データ] [根拠]

1) ディベートの準備

●主張の軸の設定とデータの絞り込み

チームは、ディベーターとして戦った後、その失敗からデータの重要性に気づいている。

A1 では、要素を詰めすぎたことが反省されている。これについては審判からの指摘もあったようだ。データ要素の絞り込みが「論がぶれない」一貫した論理展開に繋がり、次のディベート以降の勝利をもたらしたという。A1「初回で要素を詰め込み過ぎて主張がずれてしまった。絞りきれずに発言し(略)矛盾する点や、論が論を弱くしてしまう事態が起きてしまった。敗北から「論がぶれないようにすること」を学んだ」「情報を集めすぎ

てしまったために審判に一番使いたいデータが分からな
いと言われてしまった(略)気づきませんでした...」

「論がぶれない」ことを、A2に示すように「主張の軸」と表現しチームで共有している。

A2「全員でデータを共有し立論を作成することで、チームとして主張の軸を持ってディベートに臨むことができた」

●都合のよいデータから予想に基づくデータ選択

A3からは、「都合のよいデータ」から「相手の裏を読んでのデータ」収集へとデータ選択における観点のシフトが窺える。

A3「最初は自分たちに都合のいいデータばかり見つけてはそれを主張していた。しかし、回数を重ねていくうちに、データが古いのではないか、根拠として弱いのではないか、ここがもしかしたら突っ込まれるかもしれない、この主張をしたら相手はこう言ってきてくれそうだな、だからこれについてのデータをもっと集めておこう、というように、ただただデータを集めるのではなく相手のことを考えて裏を読むようなことができるようになっていった」

A4からは、「予想」に基づいて、立論よりも先となる反駁のための資料集めができるようになっていくことがわかる。

A4「相手側の立論を予想して反駁資料を揃えて、すべての主張に対して根拠をもって反駁することができた」

●ディベートのコントロール力とデータ選択精度

A5では、データの選択能力の向上と表現されている。A5「準備するデータの選択精度が上がってきたことで当日のスムーズな進行につながった。自分たちがどのように試合を回したいかを考えることにつながり、ディベート能力の向上を感じた。主張に説得力を持たせるには(略)次第にデータ選択の質が上がり、結果主張に強みを持たせることが出来た」

「試合を回す」つまり試合運びをデータで操れることを知り、想定に合わせてデータを吟味していたことがわかる。主張に強みを持たせ、ディベートをコントロールする力を獲得したといえる。ディベートのコントロール力については、A6からも窺える。

A6「相手に尋問を誘導させ、その尋問をあらかじめ予想しておいて説得力のある答えをするというようなビジ

ディベートと事前事後ライティングの融合授業における大学新入生の学び

ョンが見えるようになりました」

A6 では、尋問を誘導するといった高度なテクニックを身に付けていることがわかる。

●データ収集と説得力のあるデータ提示方法

「データが少ないと感情的に訴える」という負の連鎖を見抜き、それを断つために、「直接的なデータではなくても関連するデータを集めたり、自分たちでアンケートをとったり」したという。主張を崩されないための強固な鎧とするために、データに工夫をしたようだ。

「なるべく数値で使う」といった説得力のあるデータの示し方も学んでいる。

2) ディベート・チームの打ち合わせ

ディベートのチーム内での具体的なやりとりの記述があるため、分析を進めてみる。

●チームでの敗因の反省と対策

勝敗による「嬉しさ」や「悔しさ」が、チーム一丸となって戦うモチベーションとなっていたことが推察できる。「惨敗したという悔しさ」から、「メンバーとの話し合いの時間を何度もとったり、(略)多くの要因について深堀した」とチームをあげての真剣な取り組みが窺えた。「班での意思疎通が取れていなかった時(略)班での認識のずれが起こり、論がバラバラになってしまった」と分析し、その後、「(負けた)原因を班員全員で考え、次から徐々に対策が出来ていった」と、意思や認識の統一を重視し、対策に繋がったようだ。

●チームメンバー間の相互作用と個への内化

チームメンバー間での相互作用も、次の記述から窺える。「自分のあげた理由の不足している点をすぐに指摘してもらえた」「異なった視点があってそれに触れながら論を深めたりすることができた」「チームの仲間の発言を聞いて、幅広く物事を捉えることができるようになった」不足点、異なる視点、俯瞰的な見方を得て、相互に刺激を与え合いながら、学びを深めていることがわかる。

留学生のいたチームでは、A7 に示すように、互いの学校文化の違いを知り異なった相互作用もあったようだ。A7 「日本人があたりまえだと思っている部分(日本の学校教育)を知らなかったため、説明しニュースを共有した」「(母国の制度を尋ねたが)小学校の先生のイメージ1つをとっても国によって様々で、その面白さを実

感すると共に、視野を広げなければいけないと感じた」

また「どのような主張をすれば相手に対して説得力を増すことができるかを自分なりに考えられるようになった」といった記述があった。チーム内での複眼的な学びが内化し、個の能力の確立に繋がっていったと推察される。

●協働による役割意識、自己効力感

チーム内では、精神面の成長もみられる。A8~A10 からは、団結力の高まりと、他を想いやる気持ちの醸成が窺える。

A8 「勝敗がついてしまう活動をグループでやったことによって(略)グループ内で自分がどう動いたらいいのかということを考えられるようにもなりました」

A9 「立論・尋問・反駁・最終弁論を(略)それぞれ経験したので、仲間にアドバイスできたり、仲間のことを思って準備したりできました(略)仲間の姿を見て学び、向上にもつながった」

A10 「論理的思考を養うだけでなく、コミュニケーション能力も高められ、良い経験が出来た」

チームで過ごした時間について、「これまでしっかりと準備をしてディベートに臨んだことはなかった(略)班員と(の時間が)充実した時間であった」という記述があった。共に探求することによって充実感がもたらされていたことがわかる。A11 に示すように、人間関係の構築の大切さや自己効力感も感じていたようだ。

A11 「人と関わることの大切さや楽しさを改めて感じました。それと同時に、周りの友達が自分を輝かせてくれているのだとも感じました」

3) 他チームのディベート

●他チームからの学びとディベート・スキーマの獲得

他チームのディベートからの学びとして、「客観的に見ることができるようになった」「異なった視点や考え方を得ることができた」といった記述がみられる。

A12 からは、ディベートのスキーマが生成されていたことが推察される。

A12 「だんだんここで何を言うべきなのか、どんな資料を取り上げるべきなのか、自然と身についていった」

●ディベートの本質を評価する力の獲得

A13 からはディベートの良し悪しを主観的に判断する

ディベートと事前事後ライティングの融合授業における大学新入生の学び

のではなく、量と質を天秤にかけて判断する力も身に付けていることがわかる。

A13「審判をする際にも、自分が納得した側を勝利にするのではなく、各立論を比較してデータの根拠の強さなどから成り立つものの数を比べて公平にジャッジすることができた」

A13に関連し、審判の判断に依存するのではなく、自身が身につけた能力で判断し、悔しさを滲ませながら内省する記述もある(A14)。

A14「自分の支持する観点よりも相手の班の意見に共感する場合もあり、負けたチームが勝つべきだったと考えて、悔しかった時もあった」

B【心的態度の変容】

[とても][大変][楽しい][慣れる][回数][重ねる]

●自信の無さからの脱却と知的ゲームの享受

ディベート開始当初、「的外れな意見をいうのではないか」と言う自信の無さや、「データの入れ方、証明の仕方、相手方への反対意見の仕方」がわからず不安な状態であった」という記述がある。しかし、ディベートを重ね、「論理的」「説得力を持たせる」スキルを獲得し、解消されていったという記述が多くあった。B1からは、ディベート時の実体験により感覚を養っていることも窺える。

B1「最初は(略)難しかった。しかし、ディベートの実践を重ね、私は人前で話しながら実際に聞き手の反応や相手側の意見を聞くことによって、ディベートの形式にある程度慣れ、論理的に考える力が向上したと考える」

B2からは、「なんとかディベートができる状態」から「強い主張による勝利」へと目標レベルを上げていることが推察される。

B2「ディベートをやったことがなく(略)1回1回のディベートの準備に時間がかかってしまっていました。しかし回数を重ねることにより強い主張をして勝利するにはどうすればいいのかということまで考えて準備ができるようになりました」

さらに、ディベートが負担な状態から、ゲームとして楽しむ状態へと変化したことがB3からわかる。

B3「最初は毎週ディベートなんて大変だ...と消極的でしたが、そのうち皆で会話ゲームしているみたい!と思うようになり、とても楽しかった」

C【主張文・ライティング】

[書く][主張][文][書き方][参考][表現][フィードバック]

●ライティングスキーマの獲得

ライティングについては、C1~C3にある「フォーマット」「形」「コツ」といった言葉から、スキーマが生成されていたことが推察される。

C1「論点を最初に挙げてそれに対しての論を次に展開していくというフォーマットは、今後も文書を書くときに生きてくる知識」

C2「何かを述べる際に、まず、自分の立場や自分の支持する意見を述べてから、それについてもっと詳しく述べるという形がつかれるようになった」

C3「最初は(略)面倒だなという気持ち...何度も書いていくうちに書き方のコツをつかむことができ、論理的な文章を書くということに対して抵抗感が減りました」

C4からは、主張と根拠から成る論理的緊密性、構造についてもスキーマが生成されていることが考えられる。

C4「書いた言葉を裏付ける根拠と主張の関連性がより強固になるように意識して文を書くことができるようになりました」

C5をみると、構造スキーマと具体的内容との相互作用のために、マインドマップを用いている者もいたことがわかる。

C5「簡単に関連性についての図を書いてから文章を書くようにしました。すると、書きながら頭の中で文章の構造をイメージすることができました」

●ライティングスキルの具体の学び

ライティングの変化についての認識も記述されている。C6では、話し言葉から書き言葉への移行が窺える。

C6「最初、口語文が多発していて(略)なるべく文語文を自然に使えるように何回も主張文を書くように努力したら、だんだん上達してきた」

C7では、語彙表現、速さの向上、段落の組み立て方、根拠の提示の仕方についての向上を自覚している。完璧な文にすることがなかなかできず、行きつ戻りつしながらも能力を伸ばしていることが推察される。

C7「書きながら頭の中で言葉や言い回しが思いつくようになった。その結果、書く速さや語彙力は増えたと思う。しかし、完璧な主張文を書くことは出来ず、何かが出来るとなっても新たな何かが出来なくなる、とい

ディベートと事前事後ライティングの融合授業における大学新入生の学び

ったことの繰り返してであり頂上には達しなかった。波がありながらも段落の組み立て方や論理的に述べるための根拠の持って行き方は理解し、確実に上達はしていると思う

その他、「自分の意見と引用による根拠を分ける」「参考文献、引用の書き方」「相手に伝わる構成」「言葉一つひとつの選択に責任をもつ」「論理の飛躍の回避」といったリテラシー能力の獲得に関する記述も多くある。

また、添削のフィードバックを受け、「相手にうまく伝わらない部分が明確となり、自分の文章の書き方の悪い癖を知ることができた。全ての人に伝わりやすい文章が書けるようになった」と自分の欠点を認識するとともに、読み手意識が高まっていることが窺える。また、C8のように具体性、簡潔性において修正している。

C8「はじめの頃は、同じような表現を重ねて使ってしまったり、根拠を挙げる際に抽象的すぎる表現を使ってしまったたりと改善点を多く指摘して頂いた...言い換え表現を工夫したり、根拠を挙げる際には端的かつ具体的に書いたりするようにした」

D【ディベート（話す）とライティング（書く）の統合】 [書く][話す][考える][論理][自分][意見][統合][たくさん]

●スピーキングとライティング能力の同時向上

ディベートとライティングを統合した方法論については、「主張文を書かずにディベートだけで終わってしまったら、ここまで論理展開を考慮して意見を述べることは出来なかった...」という記述があった。

同じ目的に向けて両手段でアプローチしたため、スピーキングとライティング双方に効果があったことが指摘されている（D1、D2）。

D1「二つとも最終目的は相手をうまく説得することであったため、（略）話すことに書くことが加わったことによって、考えをまとめることも、人前で発表するのもしやすくなった...」

D2「論理的に組み立てる力を書くことと話すことの両面で身につけることができる」

加えて、「話すことも書くことも一度に力を伸ばすことができた。よりたくさんの力を少ない時間で身につけることができた」と効率性も指摘されている。

また、D3からは、「行き来した反省」がなされていたことが推察された。

D3「同時に学べた。一つの反省を両方に生かせそうなることもあり良かった...。片方ずつ行っていたならば、両方を行き来した反省が出来なかった（略）同時進行は大変ではあるが、とても良い学習法であった」

●ディベートからライティングへの影響

ディベートからライティングへの具体的な効果については、対戦相手を思い浮かべながら「緊張感」をもって執筆できたことが報告されている。D4からは、対戦チームが提供したデータから新たな気づきがあったことがわかる。

D4「（ディベート時、対戦チームとの）データの共有からより客観性のある根拠を用いながら論述することができ（略）自分にはなかった新たな視点を習得することが出来たため、より多角的に論述することが出来た」

また、D5～D8からは、ディベートの経験を生かして、データを補完したり選択したりして説得力のある主張文になるよう、データの探索と推敲を重ねたことがわかる。D5「ディベートの前は、そのまま書くという感じであったが、「ディベート後は、ディベート内での意見を踏まえて、自分の意見を整理してから書くことができ、説得力のある文章（になった）」

D6「相手の主張や自分のチームへの反論をもとに、相手の主張に負けないと思われる主張とその根拠を入れるようにしました。またディベートを通して弱いと感じた根拠を消すこともありました」

D7「ディベートで相手から攻められてしまったところを言い方を変えてみたり、新たなデータを調べたりしてより完璧な論の展開をすることができた」

D8「主張を裏付けるようなデータを再度探したり（略）説得力のある主張文をかくことができるように推敲した」

ディベートを、篩（ふるい）に見立てている記述もある（D9）。前のライティングが篩に掛けられ、中身の濃い成果物へと変容したということである。

D9「前と後で全く異なった。ディベートをする前の自分の意見が変わることもあれば、逆に自分の意思をより強固にできるときもあった。（略）周りからの風を受けることで自分の意見に対する考えが豊富になり、より中身の濃い主張文を書けるようになった」

さらに、「自分と反対側に立つ人の意見を踏まえて、その意見を覆すように書く」という記述もあった。ディベートの反駁をライティングに反映されるというテクニ

ディベートと事前事後ライティングの融合授業における大学新生の学び

ックである。D10からも窺える。

D10「こんなことも考えられるが」などと相手がディベート内で話していたことを入れて、それでもこうであると述べることでより強い主張ができるようにしました」

D11「ディベートは相手の意見をひっくり返さなければならぬため、自分とは反対の意見を（略）考えて文章を書けるようになった」という。

●ライティングからスピーキングへの影響

一方で、ライティングがスピーキングに影響したという指摘もある。

D12では、ライティングのスキーマに合わせてスピーキングを考えたことが推察される。

D12「話すことを優先的に考えて資料を集めたので、書くときにその内容を凝縮して簡潔に書くことが難しかった（略）書くことも課題であったので、本当ならだらだらと語ってしまったであろうことも、簡潔に述べることができました。統合させた授業は私にとってとてもよかった」

また、ディベート時にスピーキングとライティングとの行き来した作業が行われていたようだ（D13）。

D13「最初は、きちんと相手の意見に反論できているか、自分に、主張に矛盾がないか等不安に思う要素が数多あり、話していて頭が真っ白になってしまいました。そこで、相手の反論を予想して反駁の雛型の原稿を書くことにしました。作戦タイムを使って追加点を原稿に書き足すだけで自信と余裕をもって反駁に臨むことができました。実際に書いたものを読み上げることは、論理的に書いているかどうかを確認する手段の1つになるということ学びました」

ライティングがスピーキングの足場かけになっていたり、スピーキングでライティングの論理性をチェックするといった相互乗り入れの状態であったことがわかる。

また、スピーキングとライティングの違いを認識した上で、スキルを磨いていたことも推察される（D14）。

D14「話すことと書くことでは、やはり良い伝え方というのが異なる...具体的には、話すときには強弱やスピードを工夫したり、間をとって引用部分と主張の部分分けたりといった工夫を行う。一方、書くときにはデータを多く盛り込んでも相手に内容が伝わりやすい。このような伝え方による構成・表現の違いを身につけることが出来た点が良かった」

また、ディベート前後に2回主張文を提出することに

ついて「やりっ放しではなくしっかり反省し」それが「ディベートスキル向上につながった」という記述があった。また、留学生は、この2回のライティングを活用して、日本語の文法、段落等の推敲も行っていったようだ。

E【視点の獲得】

[生かす][論題][多角][視点][見る][客観]

●コミュニケーション・リテラシー能力の獲得

コミュニケーションの仕方の変容について語っている記述がある。

E1「私は、今までは（略）意見が二つに分かれる時には、自分の意見をどうにかして伝えようとすることしか考えていなかった」

E2「今までは、自分が思い立ったことをそのまま話したり書いたりしていた」

E3「ひとつの記事をそのまま鵜呑みにしてしまうと偏った意見しか捉えられていない」

E1～E3からは、これまでのコミュニケーションのあり方や自身のリテラシー能力を反省している。

この授業では「色々な視点から物事を考える」「有効な意見やデータを選び、つながりのある論理展開をすることができるようになった」「相手側の立場から考えられるようになった」「多くの記事を調べて多面的に捉えることが大切だとわかった」と客観的、多角的視点が得られていることが述べられている。

F【社会問題の認識】

[社会][問題][情報][集める][資料]

●社会・教育問題の背後にあるものを読み解く力

論題に関する探求過程における学びが報告されている。F1、F2からは、現代の教育や社会問題を多角的に見て、その背後にある根拠や仕組みを考える経験になっていることがわかる。

F1「将来、教員になることを目指している私たちにとって極めて重要な体験だった...なぜなら現代教育及び社会が抱える問題を多角的な面で見、私達なりに情報や根拠を集め、これらの問題の解決に取り組める体験だからである。将来、社会人になることにあたって必要不可欠な能力である」

F2「今現在、どのような理由で学校が変化しているのかを知ることができて、将来教師になる身として何をすべきかを考えることにつながりました。（略）（教師にな

ディベートと事前事後ライティングの融合授業における大学新入生の学び

った時) ディベートの時みたいいろいろな問題、課題を客観的に多角からとらえられるようにしたい...将来に活かしていきたい」

学校問題や課題を多面的に捉え、背後にある要素やそれらの関係性を読み解いた経験を将来教師になった時も活かしたいと述べている。「多くの人がその問題を認識し、解決に向けて行動できるといいと思う。ディベートは問題意識を持つためのいいきっかけになった」と、問題意識をもつきっかけになったこと、行動に移していきたいという意欲もみられる。

「将来教員になったときに、生徒に対してわかりやすく話す」というスキルを今後も磨いていきたい」

「今後、このような経験は様々な場面で生かすことが出来るのではないかと考える」といった記述からは、今後の生活、将来教員になった時に生かそうという意識がみられる。

6. 結論

6.1 結果のまとめ

授業全体のフローに、主な学びと作業内容を記したものを図4に示す。

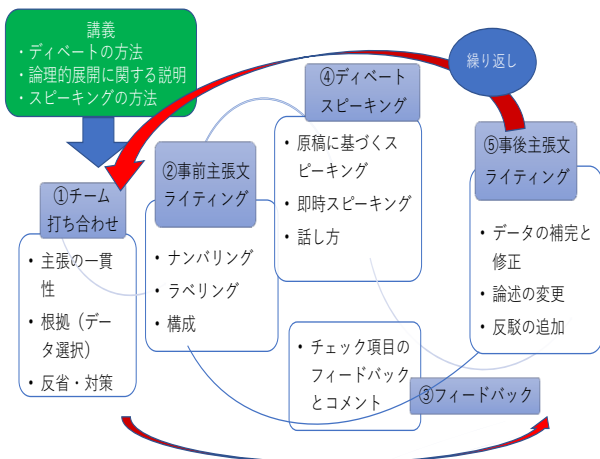


図4 学びのプロセス

図4からは、講義での教授から、チームの打ち合わせ(①)、ディベート前の主張文の執筆(②)、添削によるフィードバック(③)、ディベート(④)、ディベート後の主張文の執筆(⑤)、チームの反省(①)といった各領域の学びがサイクルとなっていたことが推察できる。本稿5節の記述分析から得られた、テーマごとに抽出されたキー概念を整理すると表4のようになる。

表4 テーマごとのキー概念のまとめ

- *****
- A ディベート
- A-1) ディベートの準備
- ・主張の軸（ぶれない論）⇒データの選択精度の向上（相手の裏を読む）
 - ・予想⇒ディベートのコントロール力
⇒データの可能な限りの収集と効果的なデータの提示の仕方
- A-2) ディベート・チームの打ち合わせ
- ・チームでの敗因の認識（意思疎通不足、認識のずれ）⇒対策
 - ・チームメンバー間の相互作用⇒不足点、異なる視点、俯瞰的な見方の獲得、複眼的な学び⇒個の能力の確立
 - ・協働による役割意識、自己効力感
- A-3) 他チームのディベートからの学び
- ・客観的、異なった視点や考え方の獲得
 - ・ディベートのスキーマ
 - ・ディベートの本質を評価する力
- B 心的態度の変容
- ・自信の無い状態、不安⇒論理的・説得力を持たせるスキル獲得
⇒自信
 - ・ディベートのスキーマの獲得
 - ・負担感、消極的態度⇒知的ゲームと捉え、楽しさの享受
- C 主張文・ライティング
- ・ライティングのスキーマの獲得（論の展開の仕方、論理的な文章、主張と根拠の論理的緊密性、文章の構造、ラベリングの実践、面倒⇒抵抗感の少ない状態）
 - ・多様なライティングスキル、リテラシー能力の獲得（語彙・表現、スピード、口語体⇒文語体、論理的文章・根拠の提示、引用、参考文献の書き方、言葉の重み、論理の飛躍回避、読み手意識、抽象的記述⇒具体的記述）（フィードバックからも学ぶ）
- D ディベートとライティングの統合
- ・説得力、論理性の同時追求と効率的能力の向上
 - ・行き来した反省⇒双方の能力向上
 - ・同時作業の大変さ⇒良い学習法と認識
 - ・ディベートからライティングへの影響
＝緊張感、意見の整理、強い主張と根拠、言い方の修正、データの補完、データの再探索と推敲による説得力の追求
ディベートが篩（ふるい）⇒豊かで、中身の濃いものへ、反駁のテクニックの反映
 - ・ライティングからスピーキングへの影響
＝簡潔な記述、ライティングがスピーキングの足場かけ
ライティングで論理性のチェック
 - ・ライティングとスピーキングの違いの認識
（構成、表現の仕方の違い、話し方・態度の意識）
- E 視点の獲得
- ・自分の意見を通す、思い立ったままの記述、情報の鵜呑み
⇒多角的な視点、論理展開、相手立場の理解、客観的視点
⇒コミュニケーション・リテラシー能力の向上
- F 社会問題の認識
- ・問題を多角的な面でも見て、自分たちなりに情報・根拠を収集
＝問題解決に取り組むことを体験
⇒将来社会人になって応用したいという意識
⇒教師になった時の態度の認識（教育問題を客観的、多角的に捉えたい）
 - ・ディベート＝問題意識をもつきっかけ
⇒教師になった時、スキルを生かしたいという意欲
- *****

ディベートと事前事後ライティングの融合授業における大学新入生の学び

図4および表4から、講義における一方向的な知識の教授に始まり、チーム内でのピアラーニング、添削でのマン・ツー・マン指導、ディベートでの他チームとの相互作用と多様な学びの場が創成され、相乗効果を上げていたといえる。

学生は、実体験で感覚を養い能力向上の手応えを得ることで、積極的、能動的態度へと変化していった。スパイラルに繰り返されるプロセスを通して、知識が補完され精密なものへと進化していった。

ディベートおよびライティングに関する知識は、多様な体験の中で記憶として刻み込まれ、スキーマ化していったと思われる。授業の講義では、文章構造、根拠の重要性を指摘したが、毎回異なる具体的内容と規範の構造スキーマとの相互作用がなされていたと推察される(図5参照)。

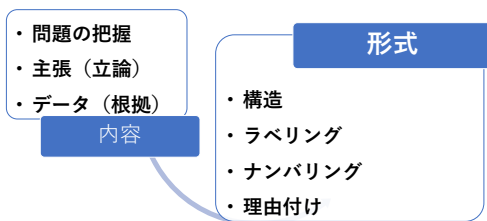


図5 形式スキーマと内容との相互作用

ライティングとスピーキングの統合という試みについては、論理性を目指した同じ目標、1つの反省を双方に生かすという知識の相互乗り入れがみられ、能力の同時向上という効果がみられた。ただ、スピーキングについては、即時的な活動だからかまだ満足のいく力には達していないという内省の記述もあった。今後の課題である。自由にディスカッションもしてみたかったという感想もあったため、ディベートを数回行った後に自由討論の時間を設け、スピーキング力の育成を図るのもよいかもしれない。

論題につき、学生は多様な教育や社会の背後にある複数の要素を1つひとつ読み解き、要素間の関係性にまで考えを深めていた。論題の対立する意見を検討したことは、多角的かつ客観的な視点の獲得を促進したといえる。また、学生は、将来教員になった時の自身の関わり方にまで想いが及んでいた。留学生がいたチームでは、国によって異なる学校文化を認識し、視野を広げる重要性も学んだようだ。

6.2 授業目標に関する効果

冒頭で述べた本授業の目標と照らし合わせて効果について考えてみると、記述分析により明らかになった具体的な学びからは、この授業が、新入大学生のリテラシー能力の育成に役立っていたことが明らかになった。加えて、もう1つの目標であった、大学生活を有効に過ごすための基盤となる知識獲得にも効果があったといえる。振り返りには、次のような記述が授業の感想として付け加えてあった。「(この授業は)大学生活における初めての触れ合いの場であり、いわゆる初めの一步だった。この授業では、緊張感を和らげながら...「大学生活はこう言うものだ」という感覚を得ることができ、大学の授業に取り組むにあたっての模範になった」大学の授業で、どのように学ぶべきかを体験し、大学生活への不安を解消し、意欲を掻き立てる場となっていたことが窺える。

参考文献

- 鄭愛軍・谷守正寛(2012)「日本語教育におけるディベート授業の試みー青島理工大学における実践より」『教育研究論集』2,45-54.
- 東海大学留学生教育センター・口頭発表教材研究会編(1995)『日本語 口頭発表と討論の技術 コミュニケーション・スピーチ・ディベートのために』東海大学出版.
- 野原ゆかり・浅野有理(2011)「プロセスに注目したディベート授業の可能性ー日本語学校における試みー」『言語文化と日本語教育』41,50-59.
- 橋本ゆかり(2013)「ディベートとライティング活動を融合させた授業の試みからー論理的展開能力の育成のためにー」(第45回日本言語文化学会ポスター発表要旨)『言語文化と日本語教育』46,61-64.
- ヴィゴツキー, L.S. (1934)『思考と言語』柴田義松訳(2001)新読書社.
- 文野峯子(1994)「日本語教育におけるディベート活動の利点」『日本語教育方法研究会誌』1-2,32-33.
- 正高信男・辻幸夫(2011)『ヒトはいかにしてことばを獲得したか』大修館.
- 山田ゆかり(2006)「大学新入生における適応感の検討」『名古屋文理大学紀要』6,29-36.